

創作のすべては 植物ありき

植物アーティスト

中島大輔

美しい絶壁の景観を表現した『断崖盆栽』や、盆栽と仏像を融合させた『仏像盆栽』などアート盆栽で名高い植物アーティストの中島大輔氏。最近では、土を使わず水だけで観葉植物を育てる水耕栽培のプロダクトにも取り組む。「いずれの活動も根底にあるのは、もっと身近にグリーンのある暮らしを楽しんでもらうこと」と中島氏。暮らしのなかで植物を愛で、自然のサインに耳を澄ます作家の想いに迫る。

取材・文／石井里枝 写真提供／東京盆栽生活空間



中島大輔（なかじま・だいすけ）氏
植物アーティスト

アート盆栽プロジェクト『東京盆栽生活空間 (<https://tokyobonsai.jp/>)』主宰。水だけで育てる植物ブランド『WOOTANG (<https://wootang.jp/>)』クリエイティブディレクター。「もっと身近にグリーンのある暮らしを」という考えからライフスタイルに根差した様々なプロジェクトを展開中。絶壁の景観を表現した『断崖盆栽』や、盆栽と仏像を融合させた『仏像盆栽』など、植物アーティストとして多彩な作品群を発表している。

NEIGHBOR

vol.588

February 2023

2



創作のすべては
植物ありき
植物アーティスト／中島大輔

植物の多様性と自由さを受けとめて創作に活かす

「僕の創作活動は、すべて植物ありきなんですよ」
 そうさりとってのけた植物アーティストの中島大輔氏は、聞けば聞くほど、植物をどこん深く理解しようと努力し、とことん純粹に植物を愛する人だった。

「作品に植物を用いる以上、まず受けとめるところから始めるべきだと思っています。その植物から何かを感じる事ができれば、まずそこでイメージが閃くはず。さらに、生まれたイメージを『どうやって作品に落とし込んでいこうか』って考えていくのが、僕の創作のあり方ですね。形も大きさもそうですが、成長の仕方も含めて、植物を完全にコントロールすることなんて人間にはできないし、やるべきじゃないと思う。それに所詮、みんな僕の思う通りになって結局ならないので(笑)」

これを、あきらめの言葉のように受け取る読者もいるかもしれないが、もちろん、そうではない。むしろ表現者としてのある種の達観ととらえた方が正解である。
 「どこまでも多様でどこまでも自由なのが、植物だと思う」と中島氏。だからこそ植物との出会いは必然的に一期一会となるし、それゆえ彼の発想もまた「つ

ねに植物ありき」になるという。

たとえば『断崖盆栽』の創作のプロセスにも、中島氏の姿勢がわかりやすく表れている。根上がり盆栽とミニチュアの建物などを組み合わせたこのシリーズは、ファンの間でも人気の作品群である。いってみれば、盆栽を背景に見立てて一つのジオラマをつくっていくような楽しい感覚が、『断崖盆栽』にはある。

「それこそ全国を歩き回って、盆栽を見て回ってますね。けれど、『こういう作品をつくるために、こんな感じの盆栽を』ついでというように身構えて、探し回っているわけではないんです。こちらの型にはめ込む気持ちは、毛頭ないので……。とにかく自然体で見て回って、じっくり観察する。そうやってインスピレーションを与えてくれる盆栽



との出会いを待つ感じですね」
 出会った瞬間に雷に打たれたようにイメージが広がります。これもあれば、眺めるうちに妄想の羽が広がります。イメージが一人で飛翔し始めることもある。アート盆栽のシリーズだけでも、ほかに『仏像盆栽』や『スカル盆栽』など、ユニークな作品群を発表してきた中島氏。いずれにしても、彼の活動のすべてには「植物ありき」のフィロソフィーが息づいていることだけは間違いがなさそうだ。

東京盆栽生活空間を通じて新しい盆栽の楽しみ方を

現在は盆栽を軸にした活動に取り組む中島氏だが、それ以前には意外や意外、マスメディア関係の仕事をしてきたという。

「テレビ番組の制作会社でディレクターとして8年ほどドキュメンタリー番組を手がけ、その後は出版会社でやはり8年ほど書籍のプロデュースをしていました。時間は不規則だし、仕事には制限がないし、まさに忙殺される毎日でした。自分を見失いそうになるなかで、ウェルビーイングとでもいうんでしょうかね。ライフスタイルのなかに植物があることの価値をしみじみと感じたんです。それ以来、多くの人にこの感覚を楽しんでもらいたいと思うように



「メディアの仕事が続けたら、盆栽園に通って学びを深め、2017年には今までにない新しい楽しみ方を提案する『東京盆栽生活空間』を立ち上げた。そして、その一環として手のひらサイズの『マイクロ盆栽』や、水で育てる『アクア盆栽』を発表。代表作の一つである『仏像盆栽』も、こうした経緯のなかで誕生したという。
 『仏像盆栽』のインスピレーションを得た背景には、学生時代にアジア各国を漫遊した旅の記憶がある。とりわけ鮮烈だったのは、タイのアユタヤにある仏教寺院の廢墟『ワット・マハタート』で見た『奇跡の仏頭』だ。そこには、長い歲月のなかで成長する菩提樹に取り込まれた、仏像の頭部がまさしくあった。もとは一体の仏像が民族間の争いに巻き込まれて、破壊されたことが発端だそうだが、こうした宗教的な惨劇さえも包み込むような力が樹木にはあることを、ここで初めて実感した。当時の旅の風景は、鮮烈なインプレッションとして、中島氏の心象風景に根を張り続けているようだ。

「アユタヤの『奇跡の仏頭』のことを思い浮かべるとは、よく考えるんです。植物の生きる力というのは、本当に凄まじいなど。あのうねるような樹木の根を見たときに、すべてを飲み込むかのような力強さを感じました。僕たち

Next Vision

基本です。しかも、毎日の水やりも欠かせません。それに考えてみれば盆栽の芸術性は、手間ひまかけて繊細な作業をするからこそ維持できるわけです。けれど普通の方のライフスタイルのなかに、盆栽を維持するために必要な難しい手作業をもち込むのは、決して簡単なことじゃない。というか事実上、無理でしょう」

そして、こうした発想のなかで辿り着いたのが、水だけで植物を育てる方法だった。水やりは1週間に一度程度、水を足すだけなので、出張や旅行などで留守にしても大丈夫。観葉植物なので部屋のなかにおけるし、土を使わないので虫の心配もないという。

「育てている植物をダメにしてしまう原因の8割は、実は水やりなんです。忘れて枯らしてしまうか、もしくはあげすぎて根腐れしてしまうかなんですね。残りの2割は日照不足。でも水耕栽培を活用すれば、そのうちの二つの問題をいっぺんにクリアできます。ただし、難しいのは観葉植物ならなんでも水耕栽培できるといわけではないです……。実際、100種類ほどの植物を試してみました。が、長時間入れておくと根腐れするものがほとんどでした。日照条件や、季節などどのような環境下でも水だけで育つ観葉植物20種類を絞り込むのに2、3年かかりました」

ちなみに、『WOOTANG』のコン



セプトの一つとなっているのが『水で育てる小さな森』。その根本には、水耕栽培と向き合うことで「いかに水の存在が人の生活にとって重要かをあらためて理解できるはず」という思いもある。

『WOOTANG』の売上の一部をユニセフの『汚れた水を安全な飲み水にする浄水剤の支援』と、国際環境NGO『Role Japan』の『マングローブ保全活動』に寄付

している理由も、こうした心情があったことだという。

植物アーティストとしての創作活動や、『WOOTANG』による水耕栽培の提案のほか、中島氏にはもう一つ力を入れて取り組んでいることがある。それがワークショップを通じて、数多くの人に植物にふれる機会を提供することだ。こうした考えから、国内の大学

が強く生を意識するときに、同時に死も意識せざるを得ないんだけど、植物の生きる力には、必然的な死さえも乗り越えていくような力強さがあるような気がしています」

一方で自身の作家としてのアプローチについては、「あえて王道を行かず、ちょっと外したところで大真面目に探求するのが自分のやり方かもしれない。考えてみれば、『仏像盆栽』も『断崖盆栽』もまさしくそうですよ。けれど、植物と生きる楽しさを伝えたいという気持ちは本物なので、ネタにする気はさらさらありません。かなり角度をつけたアプローチではあるけれど、それをつねに大真面目で探求するのが僕の流儀です」と語ってくれた。

水耕栽培でグリーンを身近に植物のサインに心を澄ませます

盆栽を軸としたアート作品の発表を重ね、国内外の展示会に招聘されるなど順調な活動を展開していた中島氏だが、手入れが高難度な盆栽よりも、やがて「もっとシンプルに植物を楽しむ方法を提案できないだろうか」という思いから、新たな方向性を模索するようになる。そして、この模索が水耕栽培で観葉植物を育てるシリーズ『WOOTANG』につながっていくことになった。

「盆栽は樹木なので、外で育てるのがで苔庭をつくる授業を担当したり、コロナ禍になる以前はカンボジアの王立プノンペン大学で、学生たちにミニ盆栽をつくってもらった『盆栽ワークショップ』を開催したという。

「きっと小さな世界で自然を表現する盆栽のあり方が、新鮮だったんでしょうね。カンボジアの学生の皆さんも本当に夢中でワークショップに参加してくれました」と中島氏。さらに、「まだ確たる答えを得ていない」と断りを入れた上で、自身のおぼろげな気づきについても次のように言葉を重ねてくれた。

「個人的に思うのですが、植物と人間の間にはまだ認識しきれていない何かがあるように思う。植物には、それをサインとして教えてくれるような力があるんじゃないかってときどき感じるんです。たとえば春には、人の気分を晴れやかにする桜が満開になり、寒くなり始めた秋には樹木の葉が暖色系の色味に変わって人の心を温めてくれる。こういう因果があるのか、今の時点ではまだ僕にはわからないけれど、人の心と植物のあり様の間には、ある種の必然的な関係があるんじゃないかって思うんですよ」

なるほど。植物と共に生きることを探求する中島氏は、今も植物が発する多種多様なサインに耳を澄ましながら、その創作活動を楽しみ深堀りしようと画策し続けているようだ。今後の活動にも刮目していきたい。